

その他

解剖学用語 改訂第13版に対する私見

藤田 浄 秀¹⁾, 座間 正 和²⁾¹⁾ 逗子病院 内科²⁾ 逗子病院 放射線科**Key words:** 解剖学用語, 常用漢字, 印刷標準字体, JIS 漢字

はじめに

平成19年3月に内容を大幅に刷新した解剖学用語 改訂第13版¹⁾が出版された。しかし、その用語が必ずしも正しい常用漢字字体・印刷標準字体を用いておらず、また、漢数字を用いるべきところを算用数字を用いている用語が認められる等、解剖学用語を共有し解剖学用語に依拠して医学用語を使用している我々にとって誠に困惑すべき点が少なからず認められるので、今回の改訂の際に是非この点を考慮に入れて戴きたく思い、日本解剖学会監修の解剖学用語 改訂第13版に対して私見を述べさせて戴きたい。

本稿では解剖学用語 改訂第13版について論ずるが、必要に応じて適宜改訂第11版²⁾・改訂第12版³⁾(以下単に第11版・第12版・第13版と記す)についても言及したい。

また、以後の論を進める上で必要な常用漢字・表外漢字・JIS漢字・印刷標準字体・簡易慣用字体・正字・異体字等の簡単な説明から始めたい。

尚、第13版の詳細な正誤表が既に日本解剖学会のホームページ⁴⁾に発表されているので、細かな正誤に関しては一切触れない。

漢字の種類とその呼称、並びに字体

1. 常用漢字^{5~8)}

昭和56年10月1日に内閣告示訓令によって常用漢字が公布された。

「常用漢字」とは「常用漢字表」に含まれる漢字1,945字である。昭和21年11月16日に内閣告示された当用漢字表、並びに昭和24年4月28日の当用漢字字体表等は、常用漢字表の制定に伴って正式に廃止された。常用漢字

表は、前書きにおいて「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など一般の社会生活において、現代の国語を書き出す場合の漢字使用の目安を示すもの」であり、「過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない」と記され、そして重要な事は、この運用にあたっては「科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個人個人の表記にまで及ぼそうとするものではない」と記している事である。

現在の常用漢字は平成22年11月3日に平成22年内閣告示第二号として告示された2,136字である。それまでの常用漢字表に196字が加えられ、5字が削除された改訂常用漢字表で示された漢字である。

2. 表外漢字^{5~8)}

平成12年12月8日に国語審議会から「表外漢字字体表」が答申された。「表外漢字」とは「常用漢字表」にない漢字を意味し、「法令、公用文書、新聞、雑誌等 一般の社会生活において、表外漢字を使用する場合の字体選択のよりどころ」となることを目指して作成されたものである。この字体表では、手書き文字は対象とせず、印刷文字を対象とする。

表外漢字表において、印刷標準字体(1,022字)は、明治時代から伝統的に活字印刷に使われた「いわゆる康熙字典体」を基準にしている。簡略字体は増やさない方向でJIS漢字(3.で述べる)の中の12字を含む簡略字22字を簡易慣用字体として許容する事とし(図1, 2)、更に「しんにゅう・しめすへん・しょくへん」の三部首の漢字については既に「し」「ネ」「食」とする略字体が浸透していることから、「用いることを妨げない」とした。簡易慣用字体と認められた22字を図2に示した。すなわち、軀・掴・填・囊・頬・・・等は印刷標準字体として認められなかった。

簡易慣用字体として認められたJIS規格の略字体

JIS規格の略字体	焰 (焰)	驂 (驂)	囊 (囊)	齧 (齧)	嚼 (嚼)	枺 (枺)
	俠 (俠)	箆 (箆)	澆 (澆)	唾 (唾)	醬 (醬)	曾 (曾)
	軀 (軀)	搥 (搥)	醜 (醜)	翹 (翹)	搔 (搔)	瘦 (瘦)
	屢 (屢)	填 (填)	頰 (頰)	麵 (麵)	蔣 (蔣)	穎 (穎)
	蟬 (蟬)	顛 (顛)	萊 (萊)	蠟 (蠟)	鷗 (鷗)	屏 (屏)
		澆 (澆)	攢 (攢)	繡 (繡)	禱 (禱)	攪 (攪)

※左3列の17字は簡易慣用字体に認められなかった
()内は康熙字典体など伝統的な字体

図1
簡易慣用字体として認められたJIS規格の略体字
読売新聞 平成12年9月30日

簡易慣用字体が示された22字

	印刷標準字体	簡易慣用字体
ア	啞	唾
エイ	穎	穎
オウ	鷗	鷗
カク	攪	攪
キク	麴	麴
ケン	齧	齧
ゴウ	嚼	嚼
シュウ	繡	繡
ショウ	蔣	蔣
ショウ	醬	醬
ソウ	曾	曾
ソウ	搔	搔
ソウ	瘦	瘦
トウ	禱	禱
ピョウ	屏	屏
ヘイ	并	并
ます	枺	枺
メン	麵	麵
ロ	濾	濾
ロ	蘆	蘆
ロウ	蠟	蠟
ワン	彎	彎

図2 (右図)
簡易慣用字体 22字
朝日新聞 平成12年9月30日

印刷標準字体として明朝体活字が現在も広く用いられている。本稿も明朝体活字で印刷されている。中国明代の木版本で使われたのでこの名がある。横の線が細く、縦の線が太く、隅に三角形が付く独得のデザインである。簡便上そのうちの一種を例示したもので、各種の明朝体活字のデザインの差異は問題にしていない。また、明朝体と異なる印刷文字や筆写の文字を拘束するものではない。重要な事は、この字体表の適用は、「芸術その他の各種専門分野に及ぶものではなく、従来の文献等に使用されている字体をも否定するものではない」という点であ

る。各学問分野の用語は、何の制限も受けずに使用して構わないという事である。

3. JIS 漢字⁶⁻⁸⁾

いわゆる「ワープロ漢字」の謂である。当用漢字に含まれる1,945文字では圧倒的に漢字が不足し、けん引・処方せん・ひ尿器・だ液せん・改ざん... 等のような交ぜ書き、更に、肝腎を肝心に、輿論を世論に、哆開を離開に、障碍を障害に... 等の書き換え現象も起きた。漢和辞典に載っていない「人名用語漢字や地名の漢字」に関しては喫緊の要請も有った。とにかく漢字が足りなかつ

面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形
1-31-54	訊	訊	1-37-7	擢	擢	1-41-46	瀕	瀕	1-50-91	咬	咬
1-31-64	逗	逗	1-37-14	溺	溺	1-41-64	斧	斧	1-51-62	嘲	嘲
1-32-89	煎	煎	1-37-43	屠	屠	1-42-46	蔑	蔑	1-57-8	扁	扁
1-32-90	煽	煽	1-37-50	賭	賭	1-42-51	篇	篇	1-59-89	棘	棘
1-32-92	穿	穿	1-38-52	漣	漣	1-42-58	娩	娩	1-60-84	橙	橙
1-32-93	箭	箭	1-38-59	遁	遁	1-42-60	鞭	鞭	1-64-36	狡	狡
1-34-60	腿	腿	1-39-71	這	這	1-44-63	餅	餅	1-68-7	筵	筵
1-34-93	蛸	蛸	1-39-73	秤	秤	1-44-66	粿	粿	1-68-32	篝	篝
1-35-9	辿	辿	1-39-93	駁	駁	1-44-76	爺	爺	1-71-7	腱	腱

図3

経済産業省 JISコード表改正
 -168字の例示字形を変更- の一部
 平成16年2月20日(文献9)

たのである。

昭和53年1月に通産省によってJIS情報交換漢字符号系(第一水準2,965字,第二水準3,384字)が決められた。同年最初のワープロJW-10が登場し,翌昭和54年にはPC-8001が発売され,パソコン時代が始まった。昭和56年10月に,上述の如く,常用漢字表(1,945字)が内閣告示された。

昭和57年10月にJIS規格第一水準を搭載したPC-9801が発売された。その間JIS改正が何回も行われたが,平成12年1月にJIS拡張(正式には「JIS X 0213 7ビットおよび8ビットの2バイト情報交換用符号化拡張漢字集合」)第三水準1,249字,第四水準2,436字が発表された。JIS漢字は,常用漢字や人名用漢字に関しては文部省や法務省の取り決めに従ったが,それ以外の漢字は通産省が独自に決め,パソコン搭載の多くはJISに準拠し,「康熙字典体」を排除した。JIS漢字は,第三水準を加えれば7,604字,第四水準まで加えれば10,040字に至った。

同年12月に表外漢字字体表(印刷標準字体1,022字,簡易慣用字体22字)が国語審議会から答申された(図1,2)。

ここに至り,常用漢字字体,並びに表外漢字字体とJIS漢字字体との違いが決定的となった。

平成16年2月20日付で経済産業省は漢字コードに関するJIS拡張を改正し,規格表に示している例示字形のうち168字を,国語審議会から答申された表外漢字字体表の印刷標準字体に改め,JIS漢字を国語施策と整合させた⁹⁾。JIS漢字は実用上の必要性から,従前より「常用漢字」以外の漢字についても例示字形を示して規定していたが,国

語審議会答申においてJIS漢字と異なる字形が定められた事から,異なっている字形についてこれを改めた。また,10字が追加された。その一部を図3に示した。

驚くべき事であるが,それ迄,常用漢字は文部省(国語審議会)が,人名漢字は法務省が,JIS漢字は通産省が担当し,三者間の摺り合せ無しに漢字施策が進められていた⁶⁾。パソコン業界は非常に困惑しただろうが,ここで経済産業省がJIS漢字168字を表外漢字字体表の印刷標準字体に改めた事は,その後の漢字字体の混乱を最小限に収めたという意味で卓見であった。少しずつパソコンのJIS漢字は印刷標準字体に置き換えられて来ている。

4. 正字

中国で十八世紀に刊行された康熙字典に掲げる字体そのものではないが,この康熙字典を典拠として作られて来た明治以来の伝統的な字体,すなわち「康熙字典体」による漢字を正字と呼ぶ。常用漢字・印刷標準字体を含めて,本稿ではこれ等の字体を正字と呼ぶことにする。

5. 異体字

漢字の中には,字音も字義も同じであるが,標準的な字体と異なる文字がある。これを異体字と言う。また,同字とも言う。鳥に対する嶋・鳶,涙に対する泪・涕,煙に対する烟,..等がこれに相当する。

考え方により,広義には,正字と異なる俗字・略字も異体字に含まれるが,本稿では狭義の異体字,すなわち同字を示すものとする。

6. 俗字

公式な場で用いられて来た正字に対し,筆画を省いたり,字を構成する一部分を同音の,より簡略な文字に置

脛 脛 脛 橈 隙 囊 扁 頸 弯 鼠 脛 鈎 頰 傍
 脛 脛 脛 橈 隙 囊 扁 頸 彎 鼠 脛 鈎 頰 旁

図4

解剖学用語 改訂第13版 凡例の一覧表 (文献1)

「解剖学用語」集第13版は上段の漢字を用いて編集されているが、コンピュータの使用環境により下段の漢字を用いても差し支えないとされている。

き換えたりした文字を俗字と呼ぶ、いわゆる「略字」である。

7. 旧字体・新字体

当用漢字が定められるに当たって、異体の統合・略体の採用・点画の整理が行われた(例 櫻が桜に、経が経に)。これが新字体で、それに対して明治時代以来用いられて来た伝統的字体が旧字体である。しかし、JIS字体まで含めて新字体と称される事もある。本稿ではJIS漢字を含めて新字体とする。

標準印刷字体・簡易慣用字体・JIS漢字と

解剖学用語—正しい読みと正しい漢字—

第13版のxx頁 3. 読み、ふりがな(ルビ)、使用した漢字については、カ 筒, クワ 脛, ケツ 楔, キョウ 嗅, ジ 茸, シツ 櫛の如く 1) 音読みのうち、医学または解剖学で特殊な音、また学生の読み誤りやすいものにはルビが付され、2) 「一般用語」の項で、ヤ 野, ワン 腕の如く複数の音・訓読みもあるものは、慣用の読みニにルビンチュウが付され、3) 音・訓読みを薦めたい場合は、ニ 人 ニ 中 の如くルビニを付してあり、4) 訓読みを薦めたい場合は、タテ 十二指腸縦ヒダ, カマ 鎌, ツル 蔓の如くルビを付してあり、5) ルビはすべてカタカナ表示とし、大和ことばにはひらがなを併記されているので、用語の読みに関しては全く問題なく、混乱が生じる余地はないと思われる。しかし、問題になるものは解剖学用語の正しい漢字である。凡例3. 6) において、「読者の便を考慮し、本用語集では現在コンピュータで付されることの多い表記を用いることとし、以下の一覧中の上段にある漢字を用いたが、日本解剖学会として規定するものではなく、下段の漢字を用いても差し支えないものとする。コンピュータの使用環境より使用できる漢字が異なる場合もあるため、使用の際には適宜置き換えていただきたい。」と述べ、図4を提示している。コンピュータ環境を考え最終的には何れの漢字を使っても差し支えなく、日本解剖学会としては漢字は規定しない旨を述べている。尚、第11版・第12版の凡例2)では「第9版以来、当用漢字以外にも新字体の趣旨にそった異字体をかなり採用しているが(脛, 頸, 鼠, 頰, 囊, 橈, 脛, 脛, 弯, 鎌, 嫌など)、学会として字体まで規定したわけではなくどの

字体を用いても差し支えない。」と記載されている。

以下に、「解剖学用語」集(個々の用語ではなく、総体としての解剖学用語である事を明瞭に表す為に適宜「解剖学用語」集と表記する)を読み、いくつかの用語について字体を検討する。字体の確認に関しては、「表外漢字字体表完全対応」「JIS漢字(第1~4水準)完全収録」と銘打って出版された漢和辞典¹⁰⁾、「累計570万部」「もともと使われている漢和辞典の最高峰」「最新情報で全面改訂」と銘打って出版された漢和辞典¹¹⁾、並びに広辞苑 第七版¹²⁾を用いた。

第11版・第12版は編集方針に従って、脛・頸・鼠・頰・囊・橈・脛・脛・弯・鎌・嫌 等が用いられたが、第13版では一部変更になった(図4)。しかし、図1と図4を比較して頂きたいが、脛・頸・鼠・頰・囊・橈・脛・脛は俗字ないしJIS漢字である。弯は簡易慣用字体で、使用は許容される。尚、鎌は常用漢字、「嫌」は旧字である。何故に新字体の趣旨に沿った異体字採用としているのか不明である。また、嫌の字体も然る事ながら解剖学用語との関連は不明である。

Tonsillaは扁桃である。第11版15頁には扁、84頁には扁と両方が使用されており、第12版15頁や253頁では扁、83頁・84頁や287頁では扁と両方が使用されているが、第13版10頁や171頁では扁桃となった。扁は扁の俗字である。

Os planum 扁平骨も同様で、第11版・第12版各22頁では扁であったが、第13版26頁においては扁が用いられている。**M. planus** 扁平筋は、第13版66頁で扁が使用されている。なぜ第13版で俗字に変更したのであろうか。

Periphericus ; Peripheralisは末梢(梢?)である。第13版7頁・16頁・218頁・233頁ではいずれも梢が用いられている。しかし、第12版179頁では梢、290頁では梢、第11版11頁では梢、179頁では梢と記載されており、梢と梢とが混じっている。梢は人名漢字で、昭和58年のJIS改訂・第二次規格で法務省が定めた人名漢字に従って梢から梢に変更してしまった経緯がある。新字源¹¹⁾は梢が人名漢字・俗字とし、梢を正字として末梢を例示している。ところが漢語新辞典¹⁰⁾、並びに広辞苑¹²⁾は末梢を掲載している。梢が正しいと思われるが、稿を改めて論じたいので、ここではこれ以上は論じない。

Inguen ; Regio inguinalisは鼠径部である。第11版・第

12版・第13版の全てで単が用いられているが、単は俗字で、用いるべきではない。

Femurは大腿である。第11版58頁では腿と腿の両方が記載されている。20頁の下腿は一点しんのようにになっているが、44頁と用語索引21頁では腿と二点しんのようにになっている。第12版20頁と用語索引21頁は腿であり、44頁では大腿と大腿の両方が記載されている。第13版の19頁の大腿、20頁の下腿、81頁の大腿筋膜、151頁の大腿動脈、用語索引288頁 等全てで一点しんのように用いられている。

Spatiumは隙である。第11版13頁、25頁、196頁、200頁では全て隙が用いられているが、用語索引61頁では隙が用いられている。第12版13頁・56頁・59頁や221頁・227頁・292頁・294頁・297頁、並びに用語索引97頁・113頁 等でも全て隙が用いられている。隙は隙の異体字の様に見えるが隙の俗字である。第13版9頁・42頁・60頁・64頁・95頁・123頁・238頁・240頁・242頁 等では、全て隙が用いられている。

Medulla oblongataは延髄である。第11版155頁では延と延が混じっている。177頁では延であり用語索引35頁では延と記載されている。第12版155頁では延と延が混じっている。177頁では延であり、用語索引97頁では延と記載されている。第13版181頁・用語索引350頁では延となっている。延は漢和辞典に載っていない。

Vesica biliaris ; Vesica felleaは胆嚢である。嚢が第13版、並びに第11版・第12版でも用いられているが、上述の如く、JIS漢字であり印刷標準字体には採用されなかったため、嚢を用いるべきである(図1)。

Tibiaは脛骨である。第11版・第12版では胫骨であったが、第13版では脛骨となった。

Radiusは橈骨である。第11版・第12版では桡骨であったが、第13版では橈骨となった。

Vagina膣は、膣が俗字であり、膣が常用漢字である。第11版・第12版・第13版全てで膣が用いられている。

Collum ; Cervixは頸である。第11版・第12版では頸、クビであったが、第13版では頸となった。

Umbilicusは臍である。第11版・第12版では臍、ヘソであったが、第13版では臍となった。

Mm. pectinatiは櫛状筋である。第13版凡例^{シツ}xx頁に櫛、7頁に櫛・櫛状、133頁・134頁に櫛状筋、用語索引276頁等に櫛が用いられているが、櫛は俗字で櫛が印刷標準字体である。第11版・第12版各120頁や用語索引38頁では正しく櫛が用いられている。どうして第13版で俗字の櫛に変更したのであろうか。

Ligamentumは靭帯である。強靭と同様に靭が印刷標準字体である。ところが第13版において53頁の太字の靭帯学と靭帯結合以外は用語索引281頁、343~347頁を含めて全て靭が用いられている。第11版・第12版各49頁には靭

帯学が記載されているが、49頁、50頁~60頁のランニングタイトル、用語索引29頁には靭が用いられている。また、第11版凡例x頁、並びに第12版凡例xiiではそれぞれ靭が記載されている。どうして13版において靭が用いられる事になったのであろうか。靭が印刷標準字体、靭が正字、靭が俗字である。靭は漢和辞典に載っていない。

Palatum durumは硬口蓋で、第13版89頁、第12版248頁ではいずれも硬が用いられているが、第11版80頁では硬が用いられている。**Dura mater**硬膜も同様で第11版では硬であったが、第12版・第13版では硬になっている。しかし、第11版の用語索引17頁では硬が用いられている。第11版・第12版6頁には硬が載っている。硬も漢和辞典に載っていない。

Tendoは腱である。しかし、第13版9頁や67頁で腱が、第12版14頁・61頁・233頁 等でも全て腱が用いられている。腱も漢和辞典に載っていない。

Vagina (-ae), vaginalis鞘は、**Vagina tendinis**腱鞘ばかりでなく神経外鞘・神経内鞘・鞘間隙・眼球鞘 等と頻出する。第11版と第12版では鞘であった。第13版で83頁・85頁、用語索引402頁・403頁 等に頻出するが全て鞘である。第13版で俗字の鞘になった。

M. masseter咬筋は、第11版・第12版の各63頁と用語索引38頁、並びに第13版68頁、用語索引353頁 等の全てで咬が用いられている。咬も漢和辞典に載っていない。

Nervus trigeminus三叉神経が第13版220頁に記載されている。太字で三叉と記載されているが、220頁・221頁・用語索引359頁を含めて他は全て三叉である。第11版・第12版各180頁でも三叉神経と太字で書かれているが、その他は三叉となっている。いずれも同一頁に又と又とが混じって表記されている。又も漢和辞典に載っていない。

Chiasmaは交叉である。第11版・第12版各5項では交叉と記載されていたが、第13版では交叉となった。交だけが常用漢字に変わっている。しかし、第11版と第12版の用語索引各12頁では交叉と記載されている。尚、第12版226頁には交叉と記載されている。

交感や交連・交会も同様で、第13版では交が用いられているが第11版・第12版では交が用いられている。しかし、第11版・第12版の各用語索引12頁、13頁では交叉・交通・交連・交会となっている。校正ミス(?)であろうか。第13版は用語索引321頁でも交叉となっている。

以上、「解剖学用語」集には種々の字体の漢字が用いられている実態の一部を紹介した。念入りに探せばもっと有るだろう。

結局、交・咬・腱・靭・又・延・硬...等は漢和辞典に載っていないが、図3と照らし合わせてみれば、経済産業省が平成16年に字体変更する前のJIS漢字と思われる。「解剖学用語」集はJIS漢字の他に、漢和辞典に載っている漢字でも、正字・俗字・旧字を混じえて編集され

ている事が知られた。

第11版・第12版・第13版の各凡例を読めば、各自のコンピュータ環境を考慮して、日本解剖学会としては漢字を規定する事なく「解剖学用語」集を作成しているのだから、その意味で誤ってない。しかし、本稿作成に際して筆者等の勤務する病院中の機種異なる全てのコンピュータで試したが、これらの字体が出て来ないのである。そこで期待して「交」の入っている「漢字ソフト」を購入したが、購入後に「交」しか搭載されておらず、しかもうまく取り出せないことが判明し、更に「超漢字Vソフト」を購入したが必要なJIS漢字の半分も打ち出せず、最終的には本稿を掲載する「横浜医学」の印刷所である(株)ポートサイド印刷にお願いして漸くJIS漢字を打ち出して頂き本稿を仕上げる事が可能となった。時間的にも金銭的にもひどい目に遭った。コンピュータ環境を考慮に入れた筈の第13版「解剖学用語」集の中のかなりの漢字はもはや清打出来なくなっているのである。

第11版や第12版は、ともすれば制限色の強かった当用漢字を念頭に置いた編集であったので、その編集方針は分からなくもない。しかし、表外漢字表の告示は平成12年、改訂JIS漢字168字の字体変更は平成16年であり、その後平成19年に解剖学用語改訂第13版が発行されたのである。これ等に関しては発行者の(株)医学書院も既に周知されていた筈である。それにも拘わらずいかなる経緯で第13版の字体が選択されたのであろうか。常用漢字表も表外漢字表も各学問分野の用語には制限を設けない旨を述べているのであるから従来とは異なった編集方針に切り替えるべきではなかっただろうか。

最期に正誤表⁴⁾に目を通して見たところ、靱帯・咬頭・咬合・下腿・硬膜・橈骨・交通・交感・交連 等の如く、正しく靱・咬・腿・硬・橈・交が用いられていた。第13版発行後間もないにも拘わらずコンピュータ環境が変化した為であろうか。しかし、頬だけはJIS漢字のままであった。

ラテン語の数表記と解剖学用語

一 序数詞は漢数字一

順序を表す「第一、第二、…」 「一番目、二番目、…」等は序数詞と呼ばれる。算用数字は用いられない。すなわち、各言語の数の表記で書き記される。日本語では第一、第二、…となる。

解剖学用語 第13版で確認してみる。

一般用語の項(1~11頁)で、日本語・ラテン語・英語の順に並べて示せば以下の通りである。

- 第一 - **primus** - **first**
 第二 - **secundarius** ; - **secondary** ;
 secundus **second**

- 第三 - **tertius** - **third**
 第四 - **quartus** - **fourth**
 第五 - **quintus** - **fifth**

ラテン語の第何番目は、英語ならば **first, second, third, …** 日本語ならば第一、第二、第三、… と記載すべき事が容易に理解出来る。

更に、具体的に見て行く。

人体についての用語19頁に、指は、
 母指；おやゆび(第一指)

- **Pollex** ; - **Thumb** [I]

Digitus primus [I]

示指；ひとさしゆび(第二指)

- **Index** ; - **Index finger** [II]

Digitus secundus [II]

中指；なかゆび(第三指)

- **Digitus medius** ; - **Middle finger** [III]

Digitus tertius [III]

薬指；くすりゆび(第四指)

- **Digitus anularis** ; - **Ring finger** [IV]

- **Digitus quartus** [IV]

小指；こゆび(第五指)

- **Digitus minimus** ; - **Little finger** [V]

Digitus quintus [V]

20頁には、趾(指)；あしのゆびは、

母趾(指)；第一趾(指)

- **Digitus primus** [I] - **Geat toe** [I]

第二趾(指)

- **Digitus secundus** [II] - **Second toe** [II]

第三趾(指)

- **Digitus tertius** [III] - **Third toe** [III]

第四趾(指)

- **Digitus quartus** [IV] - **Forth toe** [IV]

第五趾(指)

- **Digitus minimus** ; - **Little toe** ;

Digitus quintus [V] **Fifth toe** [V]

更に脳室を見る(191頁・200頁)と、

第四脳室 - **Ventriculus quartus**

第三脳室 - **Ventriculus tertius**

となっており、また、後柱 後角を見る(178頁)と、

脊髓第I層 - **Lamina spinalis I**

脊髓第II層 - **Lamina spinalis II**

.....

脊髓第VII層 - **Lamina spinalis VII**

と記載されており、日本語でもラテン語でもI~VIIが用いられている。

上述の通り、日本語の解剖学用語の序数詞は漢字(漢字は今や日本語である)を用いる事、ラテン語解剖学用語の数字はラテン語を用いる事とローマ数字の使用が許

容されている事が確認出来る。同時にラテン語の第何番はローマ数字 I, II, III, IV, V, ... で記載する事、英語の解剖学用語も同様にローマ数字を使用して記載する事が許容されている事も確認出来る。この点に関してはかつて筆者（藤田）は、ラテン語で書かれた解剖学用語の数字は、各言語の数字で表記されるべきであるが、ローマ数字の使用が許容されている事、しかし、算用数字は用いられない事を具体例に基づいて報告した¹³⁾。この点を考慮に入れて、次に、39頁から45頁で脊柱、並びに胸郭、中手骨を見ると、

脊椎

頸椎 [C I -C 7]

- **Vertebrae cervicales - Cervical vertebrae**
[C I -C VII] [C I -C VII]

となっており第一頸椎、第二頸椎、第七頸椎 等が確認出来る。なお、この頸椎の部分は第13版では太字では記載されていない。次に、

胸椎 [T I -T12]

- **Vertebrae thoraciae - Thoracic vertebrae**
[T I -T X II] [T I -T X II]

と記載され、第一胸椎鉤 が確認出来る。次に、

腰椎 [L I -L 5]

- **Vertebrae lumbales - Lumbar vertebrae**
[L I -L V] [L I -L V]

仙骨；仙椎 [1 - 5]

- **Os sacrum - Sacrum**
[Vertebrae sacrales - [Sacral vertebrae
I - V] [I - V]

胸郭

肋骨 [1 -12]

- **Costae [T I -T X II] - Ribs [T I -T X II]**
第一肋骨 - **Costa prima [I] - First rib [I]**
第二肋骨 - **Costa secunda [II] - Second rib [II]**

中手骨 [1 - 5]

- **Ossa metacarpi ; - Metacarpals**
Ossa metacarpalia [I - V] [I - V]

と記載され、第三中手骨が確認出来る。

これ等を見れば、当然解剖学用語は第一頸椎、第二胸椎、第三腰椎、第四肋骨、第五中手骨、... 等と記載される筈である。ところが、筆者等が渉猟し得た範囲では、翻訳を含めた我が国の解剖学の成書で漢数字を用いて記載したものは一冊も見出せなかった。日本語による解剖学の成書では、解剖学の大御所の著書¹⁴⁻¹⁶⁾も含めて、第1大臼歯、第2頸椎、第3胸椎、第4腰椎、第5中足骨、第6肋骨、... 等の如く、算用数字で記載されているのである。

ここで問題になる事は、上記の様にラテン語・英語では、ローマ数字を用いて [C I -C VII], [T I -T X II], [L

I -L V], ... 等の如く省略されているにも拘わらず、日本語の「解剖学用語」集では、[C1-C7], [T1-T12], [L1-L5], ... 等の如く記載され、不用意に算用数字を使用している様に思われる。

尚、仙骨；仙椎は単に [1-5] となっている。[S1-S5] とはなっていない。

更に第13版を調べて行くと、220頁・221頁において、**三叉神経 [脳神経V]** (原文も三叉と記載されている。) **眼神経 [三叉神経第1枝]**

- **N. ophthalmicus [V a ; V₁]**

上顎神経 [三叉神経第2枝]

- **N. maxillaris [V b ; V₂]**

下顎神経 [三叉神経第3枝]

- **N. mandibularis [V c ; V₃]**

と記載されている。しかし、第一枝・第二枝・第三枝と記載するのが正しいのではないか。更に、これに相当するラテン語が V₁・V₂・V₃ と略記されているが、ローマ数字を用いて V_I・V_{II}・V_{III} と記載するのが正しいのではないか。

次に、アンモン角 (212頁) を見、必要事項のみ抜粋して記載すると以下の通りである。

アンモン角；固有海馬

- **Hippocampus proprius ; Cornus ammonis**

アンモン角第1領域；CA 1 領域

- **Regio I hippocampi proprii ;**

Regio I cornus ammonis ; CA 1

アンモン角第2領域；CA 2 領域

- **Regio II hippocampi proprii ;**

Regio II cornus ammonis ; CA 2

.....

アンモン 角第4領域；CA 4 領域

- **Regio IV hippocampi proprii ;**

Regio IV cornus ammonis ; CA 4

ここでも第1領域・第2領域・... と算用数字が使用されているが、漢数字を使用すべきではないだろうか。また、ラテン語の解剖学用語の略記にも算用数字が用いられているが、ラテン語の解剖学用語に本当に算用数字が用いられているのであろうか。

更に脊髓神経を見る (225頁) と、

頸神経 [C1-C8]

- **Nn. Cervicales - Cervical nerves**

[C1-C8] [C1-C8]

の様に、日本語ばかりでなくラテン語も英語の略記も [C1-C8] と記載されているが、本当に算用数字で間違いないのであろうか。

最後に、注に目を通すと12頁に1つ、2本、13頁に2点間、2つ、14頁に1区画、88頁に8つ、3部、等が認

められる。

恐らく、縦書きならば漢数字で記載され、算用数字は用いられないであろう。

縦書きが横書きになれば漢数字から算用数字が変わってしまい、日本語による地の文章中に突然算用数字が出現する事には違和感を感じる。一つ、二つ、... であり二本、二点間、三部、... と記載すべきではないかと思われる。

追 補

解剖学名に **Nucleus caeruleus** 青班核がある (第13版, 190頁)。これ自体に全く問題はない。漢和辞典で部首 | 青 (青) 部を見ると、青が常用漢字であり、青は旧字である。そこで青 (青) を含む漢字を見てみると、情欲のじょうは情、清潔のせい清、晴天のせい晴であるが、さびは錆、さばは鯖、ひとみは晴である。青と青とが混じっている。

部首 | 齒 (齒) 部を見ると、齒と齡だけが常用漢字で歯を使用するが、それ以外の漢字は齧・齧歯類・齧齧・齧齧・齧齧... 等の如く、全て歯を用いる。齒と齒とが混じっている。

部首 | 辵 (辵) 部を見ると、迅・迎・返・述・退・逆・遍... 等が正字であるが、迅・迎・返・込・述・退・逆・遍... は旧字である。また、這・逢・迄... 等が正字であるが、這・逢・迄... 等は俗語である。一点しんによつと二点しんによつとが混じっている。

部首 | 戶 (戸) 部を見ると、戸が正字、戸が旧字であり、扁が正字で扁は俗字である。部首ではないが、扁 (扁) を含む漢字を見てみると遍・編・偏・篇が正字であり、遍・編・偏が旧字であり、篇は俗字である。

上記のように、青であったり、青であったり、齒であったり歯であったり、一点しんによつと二点しんによつとであったり、二点しんによつとであったりと、漢字が極めて複雑になっている。何か原理原則があつてこうなっているかと言うと、そんな事はない。当用漢字や常用漢字を定める過程でこう決めたから、こうなっているだけである。

一体我々がこの様な字体の微細な差異を覚え切れるであろうか。誠に中途半端な国語施策の産物である。

恐らく、余程の暇人か物好き、あるいは、いわゆる「漢字で飯を食っている者」でなければ、このような漢字の微細な差異に精通する事は不可能ではないだろうか。

考 察

我が国の国語施策が中途半端であり、常用漢字や表外漢字 (印刷標準字体) の他に JIS 漢字や俗字も多く使用されている。多数の漢字の微細な差異に精通して正しい漢字を用いる事は、今や殆ど不可能に近くなっている。も

し正しい漢字による学術書・学術論文の出版を目指すならば、個人では限界があり、校正の専門家に依存せねばならない状況にすらなっている。

第11版や第12版は、ともすれば制限色の強かつた当用漢字を念頭に置いた編集であつたので、その編集方針は分からなくもない。しかし、第11版・第12版の編集方法を踏襲して、第13版は日本解剖学会としては漢字は定めない方針で、新字体、すなわち俗字や JIS 漢字を多く用いて編集されている。今や我々が有するコンピュータで、必要とする全ての漢字を打ち出す事は殆ど不可能になっている。なぜならばコンピュータに JIS 漢字を含めて全ての漢字が搭載されては居らず、また、各種コンピュータによって搭載されている文字が同じではないからである。まさにコンピュータ環境を考慮に入れた筈の第13版に依拠する事は出来ないのである。

表外漢字表の告示は平成12年、改訂 JIS 漢字168字の字体変更は平成16年であり、その後平成19年に解剖学用語改訂第13版が発行されたのである。これ等に関しては発行者の (株) 医学書院も既に周知されていた筈である。それにも拘わらずいかなる経緯で第13版の字体が選択されたのであろうか。何故に編集方針を変更しなかつたのであろうか。

結果的に解剖学の成書は、漢字に関しては「解剖学用語」集に依拠する事なしに発行されている。従つて、それぞれの解剖学の成書によって用いる漢字が異なっているのが現状である。筆者等が渉猟し得た範囲では、翻訳を含めた我が国の解剖学の成書で全て正しい漢字を用いて発行されているものは一冊も無かつた。

従つて、漢字の字体に迷つて解剖学の成書や「解剖学用語」集に目を通しても正しい漢字が分かるとは限らず、むしろ誤解が生じ、その誤解が確信に変わる可能性さえ危惧される。解剖学の成書や「解剖学用語」集にまさか誤りがあるとは全く予想していないからである。

解剖学用語は、医学用語のなかで根幹をなしている。その解剖学用語の正しい漢字が定められていない事を筆者等は大変残念に思う。

本稿を登載する「横浜医学」は、投稿規定の一つに、「④術語は各学会の用語集に従う」事とある。この規定を定めている学会誌・学術誌は多い。しかし、「用語集」に従いたいが「解剖学用語」集は初めから凡例で述べられている通り漢字を定めない編集方針を採用した為に、従う事が出来ないのである。

我々が原稿をパソコンで清打するに際して、偶々出て来た文字 (例えば類・囊・胤... 等) に変換するその段階で気付かなければ、そのまま原稿が完成してしまい、更に校正が著者校正となっている場合には漢字が正字に校正される事なくそのまま出版されてしまう可能性が大である。かくて誤りの多い学術書・学術論文 等が出回

るのである。日本の出版文化における危機である。学術書の場合には発行元の校正係に依頼する事も可能かもしれないが、学会誌の学術論文ではそれは困難であろう。だからと言って編集委員が責任校正を行う事は余りにも負担が大き過ぎる。まさか漢字の専門家に校正を依頼する訳にも行かないであろう。難しい課題である。

序数詞を用いる臓器の解剖学用語は、ラテン語の用語ならラテン語で、英語の用語なら英語で、日本語の用語なら日本語で、すなわち今や日本語となっている漢字で表記すべきであるが、ローマ数字の使用が許容されている¹³⁾、「解剖学用語」集もこの趣旨をはっきり示しているものと考えられる。しかし、今回第13版を検討してみたところ、一部で何の必然性も無しに算用数字が用いられていた。頸椎の略記[C1-C7]・胸椎の略記[T1-T12]・・・等は、[C I -C VII]・[T I -T X II]・・・等の如く、算用数字でなくローマ数字で略記するのが理に適っている。また、三叉神経の分枝は第一枝・第二枝・第三枝と記載するのが理に適っていると考えられる。筆者等が渉猟し得た範囲では、翻訳を含めた我が国の成書で序数詞による解剖学名が、全て漢数字で記載されて発行されたものは一冊も無かった。算用数字が正しいか漢数字が正しいかに迷って解剖学の成書で確認すると算用数字が正しい事になってしまう。他ならぬ解剖学の成書に誤りがあるとは夢想だにしないからである。算用数字で記載された解剖学用語に曝されていると、算用数字に対する違和感が薄れる。かくて、誤りは再生産されて行く。

縦書きでは漢数字を用いる文章が、横書きになると算用数字に変化する現象は日常的に観察される。筆者(藤田)が医科大学で解剖学を学んだ際の教科書¹⁴⁾では第1頸椎・第2胸椎・第3腰椎・第4肋骨・・・等と序数詞には全て算用数字が用いられていた。しかし、初めて手にした解剖学の教科書で口蓋等の文字に違和感を覚えたが、算用数字には何の違和感も感じる事無くひたすら解剖学用語を覚えた。ラテン語による解剖学用語の序数詞が、日本語による解剖学用語では算用数字で表記されているという奇妙さに気付いたのは、卒業後二十年近く経ってからであった。

なぜ日本語ではいとも簡単に算用数字を使用するのかを考えてみた。

漢数字やローマ数字と、算用数字の差異に対する鋭い感覚が、日本語表記では鈍くなる可能性が高いのではないか。「primoと1」「secondと2」「dritteと3」等是一目でその差異が明らかであるが、「一と1」「二と2」「三と3」.. では、漢数字と算用数字との間の敷居が低く、発音も同じで容易に往き来する為ではないかと推測される。

ところで「解剖学用語」集は初版・・・第12版・第13版であるが、序数詞は漢数字という原則に抵触するのであるか。

数字の桁が大きくなれば適宜算用数字を用いる事は、広く共有された理解ではないか。第一回・第二回・第三回・第四回として開催されていた学術集會が、その次から第5回・第6回・・・となった事例を知っているし、N響コンサート・第1889回定期公演を漢数字で記載されたのでは面食らうと思う。「解剖学用語」集が将来的に第50版・・・第100版となることを念頭に置いて初めから算用数字を用いたと考えるならば、了解可能ではないか。序数詞だから絶対に漢数字が正しいと拘泥する方が居られるとしたら、もう少し柔軟な思考をお勧めしたい。とは言っても初版・第2版・・・はおかしい。第1版・第2版・・・とした方が良かった。

日本語における数の体系は二つである。一つは大和ことば由来の「ひ(ひと)・ふ(ふた)・み(みつ)・よ・いつ・む・な(なな)・や・ここ(この)・・・」, もう一つは中国語(呉音)由来の「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ・ハチ・ク(キュウ)・・・」である。

前者において、平仮名だけでは読み難いので漢字を混ぜ用いることになったので、ひとり・独り・一人・一人ひとり・一人一人・独り者・独り暮らし・一人暮らし; ふたたび・再び・二度・双子・二子・二重(験); 三日月・三下り半・三つ巴・・・等の様に大和ことばの数は平仮名と漢字との間で往き来している。後ろに名詞(助数詞)が続かない時には、ひとつ・ふたつ・・・の様に接尾辞「つ」を付ける。以前より文化庁は、「1つ・2つ・・・」ではなく「一つ・二つ・・・」と記載すべきことを述べている¹⁷⁾。また、昭和48年6月18日の「送り仮名の付け方」(内閣告示第二号)の「2 活用のない語 通則3 例外(2) 数をかぞえる『つ』を含む名詞はその『つ』を送る。【例】一つ 二つ 三つ 幾つ」とある^{5, 18)}。「つ」は送り仮名である。算用数字に送り仮名は馴染まない。従って、1つ・2つ・・・は有り得ない。

漢字ばかりでなく算用数字にも結び付いているのは中国語(呉音)由来の数「イチ・ニ・サン・・・」である。

結 語

以上、一介の医師が、身の程を知らずに日本解剖学会監修の解剖学用語 改訂第13版に対する私見を述べさせて戴いた。勿論、述べた事項の中には誤っている内容も多々含まれているだろう事は元より覚悟の上であり、御指摘されれば甘んじて受けるしかない。しかし、それにも拘わらず私見を述べさせて戴いたのは、偏に医学に関与する我々に、いや必要とする全ての人々に、正しい漢字を含めて全面的に依拠するに足る正しい日本語表記による「解剖学用語」集を日本解剖学会が発行して下さいる事を切に願う、この一言に尽きる。

解剖学用語は医学用語の根幹をなす。

尚, 本稿作成に際して, 内閣告示や答申の年月日, 並びに字数は漢字で書かれているが, 算用数字に書き換えた。

また, 文献における発行年月は, 各々の奥付ないし前付の通り記載した。漢数字と算用数字が入り雑じっているのはその為である。

文 献

- 1) 日本解剖学会監修: 解剖学用語 改訂13版 TERMINOLOGIA ANATOMICA JAPONICA. 医学書院, 2007年3年.
- 2) 日本解剖学会編: 解剖学用語 付組織学用語 発生学用語 改訂11版 NOMINA ANATOMICA JAPONICA. 丸善株式会社, 昭和44年7月.
- 3) 日本解剖学会編: 解剖学用語 改訂12版 NOMINA ANATOMICA JAPONICA. 丸善株式会社, 昭和62年9月.
- 4) 日本解剖学会: 日本解剖学会ホームページ『解剖学用語 改訂13版』正誤表 1. 用語の修正 2. 用語の追加・削除、配置の変更
- 5) 国語研究会監修: [第6次改訂] 現行の国語表記の基準. ぎょうせい, 平成13年10月.
- 6) 倉島長正: 国語100年-20世紀、日本語はどのような道を歩んできたか- 小学館, 2002年5月.
- 7) 国立国語研究所: [問26] 漢字に「常用漢字」「教育漢字」「人名漢字」があると聞きますが, それぞれどのようなものなのでしょう。新「ことば」シリーズ14 営業に関する問答集 —よくある「ことば」の質問— 68~69頁, 財務省印刷局, 平成13年6月.
- 8) 笹原宏之: 日本の漢字, 第1刷. 岩波新書, 2006年1月.
- 9) 経済産業省: 経済産業省ホームページ JIS漢字コード表の改正について —168字の例示字形を変更—
- 10) 鎌田 正, 米山寅太郎 著: 漢語新辞典, 初版. 大修館書店, 2001年4月.
- 11) 小川環樹・西田太一郎・赤塚 忠・阿辻哲次・釜屋 武士・木津祐子 編: 新字源, 改訂新版 初版. 角川書店, 2017年10月.
- 12) 新村 出 編: 広辞苑, 第七版, 一刷. 岩波書店, 二〇一八年一月.
- 13) 藤田浄秀, 小幡徳仁: 「智歯」は「第3大臼歯」か「第Ⅲ大臼歯」か「第三大臼歯」か. Quintessence of Dental Technology, **29**: 1224-1226, 2004.
- 14) 森 於菟, 平澤 興, 小川鼎三, 森 優 著: 解剖学 第1巻 改訂第7版. 金原出版株式会社, 昭和33年3月.
- 15) 上条雍彦 著: 日本人永久歯解剖学, 第3刷. アナトーム社, 昭和45年3月.
- 16) 藤田恒太郎 著: 人体解剖学, 第18版. 南江堂, 昭和46年5月.
- 17) 文化庁 編集: [問47] 横書きの場合, 「ひとつ」は「一つ」か「1つ」か. 「ことば」シリーズ13, 言葉に関する問答集6. 66~67頁, 大蔵省印刷局, 昭和55年4月.
- 18) 文部科学省: 文部科学省ホームページ 送り仮名の付け方. 昭和四十八年六月十八日 内閣告示第二号 昭和五六年一〇月一日 内閣告示第三号 改正.